

‘お受験’ブームの背景～早期教育の現状と問題点

野 島 正 也

Reserch Note on the Early Learning in Japan

NOJIMA, Masaya

私立小学校への受験戦争を描いた連続テレビドラマ「スイートホーム」(1994年1月放映、TBS系列)は翼くんの合格で完結した。トレンドードラマの一つとして世相を反映したこのホームドラマは、人々の関心を集めた。ドラマの最終回では、高視聴率26.9%が記録された(ビデオリサーチ)。ドラマと並行して、現実でも幼児向けの早期教育をいち早く家庭に導入するなど、いささか加熱ぎみの対応がみられた。小学校受験と幼稚園受験は、局地的ながら、家庭の大きな関心事にもなっている。ドラマの中のことは必ずしも絵空事ではないようだ。

かつての「15歳の春」は「7歳の春」、さらに「4歳の春」に下降している。東京都内の大手書店では、従来の学習参考書コーナーとは別に「幼児教育教材コーナー」を設けて、「お受験」ねらいの家庭の需要に応えようとしている。また首都圏では、幼児教室数は約300あり、その内の半分から3分の1は幼児進学塾とみられている。

以下では、早期教育の全体の輪郭を確認しながら、今日の早期教育の動向をみきわめる作業を進めたい。

1 早期教育の概念

「早期教育」(early learning)の用語は、大略的にみて次の3つの意味で用いられる。

- ① 子どもの能力を成長の時期からみて早めに訓練・教育すること。人生の早期(乳幼児期)から、通例は就学後に行う教育の内容を意図的に就学前に子どもに教えるもの。その子どもの知能年齢や発育段階よりも一段高いレベルの教育を実施する。この場合「早教育」「早期開発」の用語も用いられる。
- ② 知能・才能の発達が特別に早い子どもに対して行う教育。通常の教育では、その優秀性を正當に引き出すことが困難である場合。優秀な素質の一層の発現が主目的である。「天才教育」「才能教育」「早教育」の用語も使われる。①と概念的には区別できても、実際には①と一部重複したイメージでとらえられることも多い。
- ③ 障害をもつ子どもの教育に適用される教育方法で、障害の早期発見と早期教育が有効とされる。乳幼児期の適切な教育的対応により、発達の加速を促そうとするもの。とくに脳性麻痺児、ダウン症児、言語障害児の場合、超早期教育的対応の効果が確認されている。また、精神遅滞児についても、遅滞が発見された時点で速やかに適切な指導がとられることが重要とされる。

本稿では、このところの幼児教育産業の急速な発展の中で、その効用が疑問視される、①の意

味での早期教育の発展形態に焦点をあてて、現状と問題点をさぐってみることにする。

2 早期教育の現状とその背景

1) 0歳～1歳の「超早期教育」

約140億あるといわれる脳細胞を有効に生かすには0歳から脳に刺激を与えることが大切という触れ込みで、0歳～1歳児を対象にした「超早期教育」ともいうべき対処法が行われている。幼児教育の宣伝のキーワードは「0歳」、「英才」、「IQ」の3つである。また音楽を中心とした胎教の教室も大都市圏を中心に展開中である。

「0歳教育友の会」を主催する七田眞は「赤ちゃんは私たちが考えているように無感覚・無知能なのではない。むしろ、一生の内ではいちばんの天才期にある」とし、新生児期を「一生のうちではいちばん学習能力の高い時期」ととらえて0歳教育の効用を説いている。また鈴木鎮一は「母国語は、子どもたちの教育の可能性の高さを示すバロメーターである」、「母国語の教育は、生まれた日から始まっている」とし、超早期からの「才能教育」の効用を説いている。

2) 3歳時の早期教育

3歳は習い事の適齢期といった風潮が一般の父母の中にみられる。英語、漢字、音楽、作法などが早期教育の対象となる。

早期教育の主要な関心事である英語教育についてみてみよう。一般に子どもの言語発達には次の段階が区別される。

1歳～2歳 発音・発声の基礎の形成

2歳～3歳 単語から短文の表現への発展

3歳～4歳 語彙・品詞の増加から言語コミュニケーションへの拡大

3歳から英語を習わせたいという親の希望と、それを助長する早期教育産業の基本的立場は、子どもの母国語語彙能力の増加とそれに伴い言語表現能力が急速に高まる3～4歳にターゲットを絞って教育を開始するというものである。ちょうどこのころは、子どもの自我発達は上げ潮の時期に入る。身体的には、粗大運動から巧緻運動へ身体活動能力が飛躍的に高まり、発達心理的には「第一次反抗期」を経験するころに当たり、言語教育訓練への過度の集中は、総合的な発達のバランスを崩す危険をはらんでいる。上野辰美は、子どもが外国語を習得する時期に関して、3歳からの学習に反対の立場から次のように述べている。「外国語の習得は、知的発達が急カーブを描く児童中期（8～10歳）にあたる小学校・中学校の時期に聞く・話すという音声言語を中心に体験的に訓練していくことのほうが、はるかに効果的であり永続的である。……幼児期の段階では、むしろ健康条件の確保や基本的生活習慣の自立的訓練を徹底優先する」ことが重要だと指摘する。

漢字の早期教育については、1968年より幼稚園で試みられた「石井式漢字教育」がよく知られている。これは、漢字というものはむずかしいもの、子どもには理解できないものという通念への疑義から始まる。石井勲によれば次の通りである。「記憶の仕方には、論理的な記憶の仕方と機械的な記憶の仕方がある、機械的な記憶は3～4歳の幼児期が最高で、この時期を過ぎると、あとは衰える一方だと言われるが、言葉や文字は、論理的な記憶よりも主として機械的な記憶によっているので、とくによく使われる言葉や文字は幼児期に環境から自然と吸収させるように配慮するのがいちばんいい方法である」。「日常生活を成り立たせる‘言葉’やそれに関連のある‘文字’などは理解して覚える段階に入る前の、何でも吸収する幼児期にできるだけ覚えさせた方がよ

い」。石井は、当時、小学校6年用の教科書で出てくる「腹」「胸」「肩」「背」「宇宙」「内閣」「県庁」「郵便」「裁判」「警察」などの漢字を3～4歳児が難無く覚える事実を挙げている。

音楽の領域では、かつて松本音楽院の鈴木鎮一が幼児の音楽教育（とくにヴァイオリン教育）に早期教育の考えを導入して以来、数々の試みがなされてきている。

作法では、例えば、フランス料理の作法というのがある。3歳児を対象にして料理店が「チビッ子テーブルマナー」を開催している（1991年より、宮崎市）。2時間の講習が生まれ、ワインの代わりにジュースが出されたほかは成人の場合と同様であった。おしぼりが出され、スープ、魚料理、肉料理、デザート、パンが供され、ナイフとフォークで食事する。ついであるが、一般家庭調理メーカー川嶋工業（関市）は、子どものための調理道具「台所育児」を発売し（1993年）、以来、売れ行きは好調だという。内容は包丁、おたま、キッチンばさみ、フライ返し、ボウルなど20品目で、子ども用に使いやすくしてあるという。

母親から「作法」を習うと、ついふだんのわがママがでると考えたのか、講師の自宅で作法のレッスンを受けるものも出てきている。

昨今のこうした早期教育の進展の背景には、大きく次の2つの要因があるように思われる。

- ① 独身時代にいわゆる「Hanako 世代」として余暇から仕事まで日一杯自己実現してきた時代の若い母親たちは、育児でもそれを生活の楽しみの一つとみなす感覚をもち続けた。彼女たちにとっては、子どもはペットを育てるような感覚であるかもしれない。あるいは、ブランド志向の強い親がお気に入りのアクセサリを身につける感覚ともとらえられる。子育てを通して自らの願望を表現する、いわば「自‘子’実現」の様相がみられる。
- ② 学習・教育産業やゲーム機メーカーが幼児教育産業分野を営業のターゲットに据えるようになった結果、全体として子どもの数が減っているにもかかわらず、市場の拡大傾向がみられる。例えば福武書店（現ベネッセ・コーポレーション）、公文、セガ、セシールなど各分野の企業の営業努力が早期教育の進展をもたらしている。

3 早期教育産業の新展開

業務用ゲーム機最大手のセガ・エンタープライゼズ（東京都大田区）は幼児用知育コンピュータ玩具「PICO」を年間30万台販売し、売れ行き好調と評価されている（1994年）。また、同社は、0歳～1歳児を対象にした英才教室とIQ開発教室を開設している。そこでは教師がABCや足し算の歌を歌うと、それに合わせて、母親に抱かれた乳幼児が教材のカードを指したり、めくったりする光景がみられる。

大手書店の福武書店（岡山市）は絵本、ゲーム中心のワークブックやCDを教材とした幼児通信教育「こどもちゃれんじ」を開始した（1988年）。コースは3・4歳児向け、4・5歳児向け、5・6歳児向けの3コースで受講料は月に約1500円で、書店発表の受講者数は32万人に及ぶ。

公文教育研究会（東京都千代田区）は0歳から6歳児向けの通信教育を開始した（1990年）。0歳では、童謡ビデオで言葉を吸収させ、2～3歳でひらがな・数字の読みや鉛筆で線を引く練習をする。5～6歳までに小学校1年前期までの国語・算数を学習する。

女性用衣料品の通信販売最大手のセシール（高松市）は、0歳から6歳児向けの通信教育の新分野に進出した。

各社で共通するセールスポイントは、詰め込みや「英才教育」ではなく、いわば遊びの延長線で、教材を楽しみながらいろいろな経験をもたせて、好奇心や探求心を刺激することにおかれて

いる。確かに、教材が用意する学習プロセスは、発達の段階に合わせてきめ細かく工夫され、段階的に能力を引き出す努力がみられる。

しかし一方、幼児教材の高額化も進んでいる。「家庭保育園」や「すじみち学習」などの教材セットが約25万円、ディズニーの英語教材が30～40万円となっている。教材セット販売の言葉巧みな売り込みに不本意に購入してしまうケースもみられる。これら幼児教育教材の人気は、幼児教育への親の関心の高さに加えて、親が学習を動機づけなくても子どものペースで繰り返しの学習が可能であるところにあるように思われる。しかし一方で、子への早期教育が、他の親との比較で、人に遅れはしないかという不安心理から開始される傾向もあり、親の教育観の確立過程での問題をはらんでいる。

企業ではないが、財団法人日本英語検定協会が主催する英語検定でも世間の早期教育への関心の高さが反映された結果がでている。英語（外国語）が中学校の教科に入ってくることを考えれば、それ以前に英語の学習に入るのは、早期教育の一つと見なせる。小学生での英語学習には、親の根強い要望が見られる。

同協会が主催する実用英語検定5級の小学生受験者は5万9000人で（平成5年度）、これは1987年当時の7倍に相当する。また、1994年に第1回の検定が行われた児童英語技能検定（小学生・幼児対象）では、約2万人の受験者があった。現在は、この学習効果の中長期的な効果を積極的に評価する立場と、実用的な意味で効果の減退を指摘する立場が並立している。

4 早期教育の問題点

「バリウム言葉」という流行語がある。親が子どもに連発する「○○ちゃんのためだから」の言葉の果てに、否応なく子どもは親の恣意を嚙下することになる。言われたら飲まないわけにはいかないバリウムに由来する。その結果、子どもは短期的には、強度のストレスや体の異常を訴えることにもなる。また、中長期的には、周囲のことへの関心の減退や、やる意欲の喪失などの問題群が生じる。中長期的な時間経過の中では因果関係は把握しにくい、今日の状況では、早期教育が遠因の一つとなると思われる子どもの「おかしな」行動が観察されている。例えば「おぼろっ子」「ぐにゃ」「ゲル」「無行少年」「アチャ子」などの命名例がそれである。

「おぼろっ子」は、飛んでいる虫やボールを避けることができない子。運動不足、遊び体験の不足、テレビ画面の見過ぎなどが原因と考えられる。「ぐにゃ」「ゲル」は、関心がどこにあるのか、身体的にもガラッとしてとらえ所がない子をいう。幼児期の自発的な遊び経験の不足が懸念される。「無行少年」は、保坂展人の命名といわれるが、やりたいことを我慢し、やがて自分が何をやりたいのかもわからなくなってしまう子どもをいう。大人の心理的・身体的支配が続く中で、親への反抗を含む非行のエネルギーすら失われてしまった状態である。「アチャ子」は「アダルト・チャイルド」の略か。大人の心や立場を先取りした物分かりのいい子どもをいう。自らの内部に感情を押し込めてしまうタイプである。

幼児教育の過度の適用で、さまざまな弊害が指摘されている。ある3歳児は、保健所の健診で名前を聞かれただけで嘔吐してしまった。母親によると、私立幼稚園受験のため進学教室に通わせていたという。問診と受験を間違えたようだ。また、ある幼児は受験に失敗した後、一時的に口がきけなくなったという。この他にも、感情の表現が極端に少ない、原因不明の熱がでる、全身がだるい、全身硬直がおきる、頭痛・めまいがするなど、言葉にでない身体表現の例がみられる。目にみえないストレスが「よい子」を演じる代償として蓄積されていると思われる。子ども

は「子ども」であって、「小さな大人」ではない。乳幼児期の子どもの発達段階の全ての過程を通じて、発達の自然な欲求に耳を傾けた謙虚な対応がいま求められているように思われる。母親の育児不安と根づよい受験社会の体制の中で、早期教育はこれからも増加することが予想されるが、子どものトータルな発達からみて、その功罪の論議が引き続き必要に思われる。

引用及び参考文献

- 飯島篤信他編『児童学ハンドブック』1973、朝倉書店、とくに森重敏執筆の「優秀児の教育」(258—259頁)
- 深谷昌志他編『現代子ども大百科』1988年、とくに松波和子他執筆の「早期教育」(1084—1085頁)
- 村山貞雄監修『幼児保育学辞典』1980年、391頁、明治図書
- 保坂展人「‘お受験ブーム’の危ない親子——早期教育が子どもをダメにする」『諸君』1994年12月号
- 上野辰美『幼児のしつけQ&A』1984年、101—102頁
- 七田真『赤ちゃんは天才——ここで差がつく3歳までの育て方』1991年、4～5頁、KKベストセラーズ
- 石井勲『漢字による才能開発——3歳からの漢字教育』1970、1～2頁、15頁、18頁、講談社
- 鈴木鎮一『鈴木メソッドによる幼児の能力開発』1970、4頁、10頁、三省堂
- 以上の他、東京読売新聞社、日経流通新聞、朝日新聞の記事を参考にした。

[付記] この研究ノートは、「平成6年度文教大学共同研究」として、子ども文化に関する研究を人間科学部・角田巖氏と共に進めた結果の一部を記載するものである。また、関連文献の検索では文教大学図書館の鈴木正紀氏にとくにお世話になった。